

サラリーマン川柳 30 年間の歩み

産経新聞 5 月 23 日付記事より

サラリーマンの悲哀を風刺して「五七五」に込めて詠む、第一生命保険の「サラリーマン川柳コンクール」が今年で 30 周年を迎えた。

今年の第 1 位の句は、募集の始まったバブル期に社会人になった世代と現在の若い世代のギャップを詠んだもので

「ゆとりでしょ？ そう言うあなたは バブルでしょ？」

「サラ川」の 30 年の歴史を振り返ると、そこには日本の世相が反映されている。

サラ川はもともと第一生命の社内向け企画として産声を上げた。ユニークな表現が評判となり、一般公募すると徐々に浸透。30 回目となる今年は 5 万 5 千件余りと 20 年ぶりに 5 万句を突破し、応募数は累計で 110 万句を超えた。

今年、1 位となった句について第一生命経済研究所の藤代宏一主任エコノミストは、「新社会人になった時期の社会環境が価値観に影響を与え、それが川柳に詠まれたことは興味深い」と指摘する。

第一生命経済研究所は節目の今年、昭和 62 年に始まったサラ川の 30 年間で 5 つの時代に分けて、応募作品の傾向を分析した。

この 30 年でサラリーマンの悩みはどう変わったか？

時代	作品
バブル景気 (1980 年代後半～)	1) 一戸建て 手が出る土地は 熊も出る 2) ビジネスマン 24 時間 寝てみたい 3) ブランドは 見るもの聞くもの 貰うもの
バブル崩壊 (90 年代前半～)	1) 夢さめて 株式欄を 避けて読む 2) 御取り引き バブルはじけて お引き取り 3) 十二支が 「ねーリストラ」に 聞えたり
デフレ経済 (90 年代後半～)	1) ビッグバン 俺の財布の 割れる音？ 2) 接待費 削られ上司 健康に 3) ノー残業 お持ち帰りで フル残業
金融危機前後 (2000 年代半ば～)	1) 100 年に 一度の不況が 5 年ごと 2) 「デフレなの」 小遣い減らし 妻ニヤリ 3) オレの指 スマホも部下も 動かせず
アベノミクス (2013 年以降)	1) オレの部下 半沢みたいな 奴ばかり 2) 小遣いの 異次元緩和 未だなし 3) 退職金 もらった瞬間 妻ドローン

1980年代後半～ 「ブランドは 見るもの聞くもの 貰うもの」(平成2年)
日経平均株価が4万円に迫るなど「バブル景気」に沸いた時期。

『オヤジギャル』など、元気な女性を取り上げた句もあった」(藤代氏)

90年代前半～ 「御取り引き バブルはじけて お引き取り」(平成5年)

日本は「バブル崩壊」に突入。「投資の失敗や不景気を嘆く句が多く、後悔、諦め、自虐がにじむ傾向があった」(藤代氏)

90年代後半～ 「接待費 削られ上司 健康に」(平成14年)

外食や流通業界で「価格破壊」が起きた「デフレ経済」の時代。消費税率5%への引き上げなどで日本経済は苦境に立たされた。携帯電話とパソコンが仕事に欠かせないようになり、業務効率化に向けた「IT革命への期待も高まった」(藤代氏)

2000年代半ば～ 『デフレなの』 小遣い減らし 妻ニヤリ」(平成21年)

リーマン・ショックの余波で日本は再び景気後退に入る。「サラリーマンの開き直りを感じる句が多かった」(藤代氏)

2,013年以降 「小遣いの 異次元緩和 未だなし」(平成26年)

第2次安倍政権による「アベノミクス」の時代。企業業績は過去最高水準に達し、失業率は低下するなど、日本経済の復活が意識されるようになった。

「給与や小遣いが追いつかず、不安や嘆きが多く詠まれた」(藤代氏)

ただし現在、国内ではアベノミクスの恩恵に浴するサラリーマンは大企業に限られ、海外ではトランプ米政権の動向や北朝鮮情勢をめぐり緊張が続く。さて、来年はどんな句が詠まれるのだろうか。

※個人的感想

昭和20年の敗戦後、東京は焼け野原から急速な経済成長を遂げ、戦後僅か19年でオリンピックを開催、東海道新幹線が開通、途中石油ショックはあったものの、更にその後20年間の高度経済成長、バブル時代を経て、昭和の終焉と共にバブルが一举に弾け、その反動による長いデフレ時代の延長が今日まで続いている。

「サラ川」は全員が浮かれていたバブル時代(天国)からデフレ時代(地獄)に移行したこの30年間の世相を反映したものであり、サラリーマンの心境を実にうまく表現していて感心させられる。

なお、戦後70年間の世相を振り返って思うことは、どんな環境にあっても一喜一憂せず「勝って奢らず、負けて腐らず、常に信念を持って前向きに明るく生きる」ことが「悔いのない人生」に繋がるのではなかろうか。

以上

17.05.25 守山裕次郎